

論文の内容の要旨

論文題目 近代皇族による西洋文化の受容と消費

一皇族妃のファッションを通してみる儀礼とモダニズム

氏名 青木 淳子

明治維新以降、日本の社会は西洋化が近代化を推進してきた。西洋の社会システムを導入するなかで、西洋の儀礼が宮中にも導入され、実施された。本論文では、皇族が洋行を通じて、西洋の文化を摂取し、そのことが社会システムのなかで作用し、社会生成にどのような意味を持ったのかを、女性皇族のファッションを視角として、次の 3 点を明らかにする。

- ①明治期の梨本宮伊都子妃を事例とし、外交における「皇族妃の洋行」の意義を考察する。
- ②大正末期の朝香宮夫妻の洋行における「受領証綴」を読み解き、皇族の「洋行」における生活文化を検証する。そして皇族のモダニズムの有様を明らかにする。
- ③近代皇族妃が渡欧によって摂取したファッションの意味を考察する。

第 1 章 1 節で、近代皇族の留学と巡遊の意味について、西洋文化の受容、「天皇・皇后」の名代としての外交、軍事力の牽引という 3 点を明らかにした。そこにおいて「皇族妃の渡航」は、「夫妻」だからこそ国際的な場面でのプロトコル（外交儀礼）習得を可能にする、という大きな意味を持つものであった。第 2 節では明治末から昭和初期に発行された雑誌『皇族画報』の成立を明らかにし、肖像写真の装いから近代皇族のイメージを読み解いた。写真は主に宮家から「御貸下」というシステムで入手されたが、皇室報道に対する規制が厳しかった時代に、皇族報道メディアという意味で画期的なものであった。天皇・皇后の「御真影」に続き皇族男子は軍服、皇族妃はローブ・デコルテのドレス姿であった。流行の最先端を、皇族妃のファッションは雑誌というメディアを通して民衆に伝えた。

第Ⅱ章では明治期に渡欧した梨本宮伊都子妃を事例とし、第 1 節では渡欧によるプロトコルの習得を明らかにした。伊都子妃は各国王族との謁見、晩餐、叙勲、贈答などを通して親交を深め、外交儀礼を体得した。洋行では外務省が中心となり在外大公使館、海外宮廷、宮内省、宮家と迅速かつ緊密に連絡が行われ、先例と各国均衡が重要視された。第 2 節では、パリのオートクチュールで仕立てた最先端のファッションで欧州各国の王室を訪問し、外交の場で活躍した伊都子妃の姿を検証した。気品溢れる優雅な姿は欧州社交界で絶賛され、パリで撮影された肖像写真は帰国間もなく雑誌に掲載された。第 3 節では儀式的の折に着用される和の「装束」について検証した。賢所での和の装束は皇室の伝統を証明し、「ドレス」と対峙するものだった。この両極端の衣裳の両方を、儀式で着用することで、皇室における伝統とモダニティーのバランスをとった。第 4 節では、伊都子妃の公的場面での洋装と、私的場面での和装を明らかにした。洋装のドレスは公的な場での皇族妃の「制服」であり、洋装と和装は公的・私的という場面で、近代化と伝統を表象するものとして様々に着分けられた。

1886 (明治 19) 年に規定された宮廷での女子の洋装は、諸外国に向けての政策であり、洋行は皇族妃が、本場のファッションを摂取し、それを着こなす外交儀礼を学ぶ機会であった。欧化政策の目的の一つが不平等条約撤廃であったが、それは伊都子妃帰国 2 年後の 1911 (明治 44) 年に実現した。皇族妃の洋装は、日本の宮廷における近代化の象徴であり、海外においては日本の近代化の PR であった。そしてそれが国内の雑誌に掲載される時、日本が世界においてグローバルな存在であることを、民衆に示すことができた。

第Ⅲ章では、朝香宮夫妻の 1920 年代におけるパリでの生活文化と允子妃のファッションを検証し、モダニズムとの関連において考察した。第 1 節では、朝香宮夫妻がパリで購入した物品のレシート (『朝香宮パリ滞在受領証綴』東京都庭園美術館蔵) を史料とし、約 3 年間のパリでの生活と消費構造を明らかにした。朝伯爵夫妻として日本では味わえない「自由」を満喫し、日本の一般的な勤労家庭の 140 倍という支出 (消費) を以って、趣味豊かなパリの「生活文化」を享受した。しかし豊かな「私」生活の反面、他国訪問においては皇室外交という「公」の役割も果たしたことが外交文書から明らかになった。外交儀礼の場での堂々とした振る舞いは、朝香宮夫妻がパリで受けた「レッスン」の効果でもあった。第 2 節では、朝香宮夫妻をとりまくパリの日本人社会を、経済人アルベール・カーン氏宅に残る「肖像写真」を史料として検証した。ここでは、皇族を中心として、政治や学問と関わり国際的な視点を養う富裕層や上流階級の日本人社会の一端を見ることができた。第 3 節では、允子妃のパリ滞在における服飾関連の消費行動を、受領証から検証し、衣服や服飾雑貨についてハイブランド、カジュアルファッションの店、百貨店、と着用機会に合わせた合理的な消費行動をとったことを明らかにした。允子妃は雑誌などでセンスを磨いたが、アール・デコの影響を受けたシックな色合いのシンプルなデザインのファッションを好み、スポーツやドライブなど活動的な場面では、機能性を伴うスポーツウェアも着用した。それはこの時代の新しい女性の生き方を表現したファッションでもあった。そんな允子妃の

肖像写真が、帰国前に雑誌『皇族画報』1924(大正13)年2月号に掲載された。允子妃の肖像写真は、日本におけるモダン・ガールの視覚情報の出現に先駆ける、パリの最先端ファッションの写真であった。第4節では、パリという「都市」と朝香宮夫妻の生活について、現代産業装飾芸術国際博覧会(通称アール・デコ展)との関係性を鑑みながら、モダニズムの受容という視点で、受領証綴をもとに読み解いた。当時のパリは19世紀の後半に建てられた建築物が並んだ「町並み」であったが、生活文化の中には、確かに新しい様式を確認することができた。そんな中、1925年4月からパリで時代の最先端の様式を提示したアール・デコ展が開催された。允子妃はこの博覧会の様式を享受し、朝香宮夫妻は帰国8年後に、白金にアール・デコ様式による朝香宮邸を新築した。本稿では、1920年代(大正期)から大衆の間に広まり、受容された文化現象を、日本におけるモダニズムとして定義するが、朝香宮がパリという空間で受容した消費生活が、まさにそのモダニズムを体現したものであった。パリで受容した当時のモダンな感覚は、まず衣服の分野ですぐに表現され、食や趣味といった行動を通じてモダンな「振る舞い」で体現された。そしてモダンな「感覚」の具現化は後に「アール・デコの館」と呼ばれることになる建物、つまり住空間によって結実した。そういう意味で、アール・デコの館朝香宮邸は、まさに皇族モダニズムの結晶であった。

第IV章では、I～III章まで検証してきた事柄を総合し結論を導き出した。第1節では本論の目的①である「明治期の洋行を通じた外交における皇族妃のファッションの意義」を明確にした。明治期の皇后の御真影は、国家の威信をかけ、法制に基づく政治的身体を表象したものであった一方、宮廷でのプロトコル(外交儀礼)の体得や自由な購買という「消費」を経験した皇族妃の肖像写真は、世界のトップファッションを伝えるものであり、まさに日本がグローバルな立場に立つことを内外にアピールすることを可能にした。第2節では目的②である「大正末期の皇族のモダニズムとファッション」を大衆モダニズムとの関連を検証した。皇族モダニズムは、皇族が近代の有産階級としてその財力、立場を有効に使い、海外での生活において消費文化を存分に受容した証である。国際的に通用する知性や教養を磨き、生活文化を享受した皇族妃は、本場のパリモードを着用し、自立した精神を持ち行動する、ある意味「理想のモダン・ガール」といえる存在でもあった。第3節では、皇族妃のファッションについて、服飾文化が和装から洋装に転換するその節目において重要な意味を持つことを考証した。そして第4節では目的③である「近代皇族妃のファッションの意味」を、これらの結果を受けた形でまとめた。

皇族妃の洋装について、その背景となる政治や文化という視点から解釈すると、伊都子妃の洋装は「政治的身体」を、允子妃の洋装は「自然的身体」を表徴する。だが、本論で検証した皇族妃の装いは政治的、自然的と一面的に結論づけられるものではない。伊都子妃の政治的身体は渡欧で経験して得た自然的身体を内包し、允子妃の自然的身体には、それが「皇族妃の肖像写真」として雑誌に掲載されるとき、政治的身体としての意味を持つこととなる。近代皇族妃のファッションは、コンテクストにより、多様な読みを可能とす

る。また消費という視点で皇族妃のファッションを見ると、明治期には「外交儀礼」を、大正末期には「皇族モダニズム」を読み取ることができる。どちらも多大な消費によって成立し、時代をリードしたファッションであることから、現代でいうところのセレブファッションの源流ともいえるだろう。さらに本論から、近代皇族妃の洋装のメディア性も明らかになった。まず、衣服の着用によって身体と精神の変容を見ることができることから、皇族妃の洋装は、着用者の意識を変容させていく「メディア」であったといえる。また、本人の帰国前や直後に雑誌にいち早く掲載されることによって、その時代の最先端のファッション情報を伝えたというメディアでもあった。近代皇族妃の装いは、流行の最先端のメディアとして、当時のファッションを啓発し、洋装についてのイメージを高め、ファッション情報を伝達し、ひいてはファッションをリードしたといえるだろう。